

『朱子語類』の記録をめぐる一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 垣内, 景子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5155

『朱子語類』の記録をめぐる一考察

垣内 景子

はじめに

『朱子語類』(以下『語類』と略称)を読む時、更には『語類』を自分たちの言葉に翻訳しようとする時、常につきまとう戸惑いがある。^①果たして朱熹は本当にそのように語ったのであろうか。門人という第三者の記録にかかる『語類』の信憑性を問題にしているのではない。勿論、記録者・編纂者による誤記・誤解・改竄等の可能性は常につきまとう。そういった意味での『語類』の資料的価値については、既にその編纂に携わった門人たちによってすら慎重であるべきことが指摘されている。言うまでなく、『語類』が朱熹の著作ではなく、第三者の手による記録である以上、朱熹自身の著作とされる他の文献と較べて一定の留保をつけて扱わなければならないことは、今日の朱子学研究においても暗黙の前提になっていよう。^②しかしながら、たとえ仮に門人たちが朱熹の言葉を忠実に記録したとしても、そこには話された言葉と書かれた言葉との断絶があるのではないか。

一方で『語類』は、他の朱熹自身の著作にはない価値をもつものとして重要視されている。即ち、白話で記録された語録という形式ならではの価値は、たとえその信憑性に多少の疑問が残ったとしても、無視するには惜しいものなのである。我々は『語類』を通してこそ、朱熹と門人との「講学」の場の雰囲気を知ることができ、そのことは朱熹の思想の微妙な揺れやニュアンス・雰囲気を図らずも明らかにする。『語類』は、生き生きとした朱熹像を知る上で不可欠な資料であるということも、朱熹の思想を読み解こうとする者にとっての常識に属することであろう。しかし、白話で書かれた資料としての価値が意識されていながらも、朱熹の語った言葉と『語類』の言葉との間には、言文一致に慣れ親しんでいる我々の見落としてしまいがちな深い溝が横たわっているのではないか。

例えば、我々は『語類』を翻訳する際に、基本的には直接話法の形式を用いるのが一般的である。「問……」「(先生)曰……」という形式をとる条でも、そうではなく直接朱熹の言葉から始まっていると考えられる条でも、宛も朱熹の発話を再現するかのような訳し方をする。しかし、本当に朱熹はそうのように語ったのであろうか。記録の誤りということではなく、そもそも門人たちは逐語的に朱熹の言葉を記録していたのではなかったとすれば、例えば内容を要約して記録していたかもしれないとすれば、我々の翻訳による対話の再現は、極論すれば我々の創作にかかることになってしまう。同一場面の複数の記録に誤記とは考えられない差異が見られる以上、現在我々が目にして『語類』の言葉と、朱熹が実際に語った言葉との間にどれだけの隔りがあるのかを意識せざるを得ない。果たして朱熹は本当にそのように語ったのであろうか。

もとよりこの問いかけに結論は無い。朱熹の肉声を再現できない以上、「事実」は確かめようがない。しかし、残された言葉を通して残されなかったものをどこまで意識できるかという試みは、『語類』を読む以上為されなければならぬ。従って本稿は、現在我々の目の前にある『語類』の記録がどこまで朱熹と門人たちとの「講学」に對話を忠実に

再現しているかということも明らかにはしようというものではない。そんなことは言うまでもなく、不可能である。また、記録者・編纂者・伝承者による誤記・誤解・改竄等については、別途に研究がなされなければならない。そうではなくて、話し言葉を記録するということが本質的につきまとう問題を念頭に置きつつ、残された『語類』の言葉の背後にある様々な可能性をでき得る限り数え上げ、その上で今如何にそれを読むべきかという態度を模索しようというのが、本稿の目指すところである。

一、朱熹の言葉はいかに記録されたか

『語類』は朱熹の言葉を門人たちが白話を用いて記録したものである。ところで、師の発言を記録するということは、実際にはどのように行われたのであろうか。高弟黄幹は「池州刊朱子語録後序」で「晦庵朱先生所與門人問答、門人退而私竊記之」と述べている。おそらくは紙と筆とを手には朱熹の傍らに控え、朱熹の発言を逐一書き取ったのではなく、各自が後で思い出しながら記録するのが多くのケースであったはずだ。門人たちの記憶力を不問に付すとしても、またたとえ中には紙と筆を持って同席するものがあったとしても、一番問題とすべきは、朱熹の発言が逐語的に記録されたか否かということである。以下、『語類』に残された言葉をもとに、様々な可能性を整理してみたい。

1. 同一場面の別記録から見える可能性

現在我々が目にする『語類』の中には、割注の形で同一場面のものと考えられる別人による記録が付されている条がいくつもある。その一つを取り上げ、具体的な字句の違いを比較してみたい。⁴⁾

卷一百一十五・35条「訓禹(徐禹、字居父)」

(A) 問、前夜先生所答一之動靜處、曾學云譬如與兩人同事、須是相救始得。寓看來、靜却救得動、不知動如何救得靜。

(B) 曰、人須通達萬變、心常湛然在這裏。

(C) 亦不是閉門靜坐、塊然自守。事物來、也須去應。應了、依然是靜。看事物來、應接去也不難、便是安而後能慮。

(D) 動了靜、靜了動、動靜相生、循環無端。如人之嘘吸、若只管噓、氣絕了、又須吸、若只管吸、氣無去處、便不相接了。噓之所以爲吸、吸之所以爲噓。尺蠖之屈、以求伸也。龍蛇之蟄、以存身也。屈伸消長、闔闢往來、其機不曾停息。大處有大闔闢、小處有小闔闢、大處有大消長、小處有小消長。此理萬古不易。如目有瞬時、亦豈能常瞬。定又須開、不能常開。定又須瞬、瞬了又開、開了又瞬。至纖至微、無時不然。

(E) 又問、此說相救、是就義理處說動靜。不知就應事接物處說動靜如何。

(F) 曰、應事得力、則心地靜、心地靜、應事分外得力、便是動救靜、靜救動。其本只在湛然純一、素無私心始得。無私心、動靜一齊當理、才有一毫之私、便都差了。

(割注) 淳錄云

(a) 徐問、前夜說動靜功用相救。靜可救得動、動如何救得靜。

(b) 曰、須是明得這理、使無不盡、直到萬理明徹之後、此心湛然純一、便能如此。

(c) 如靜也不是閉門獨坐、塊然自守、事物來都不應。若事物來、亦須應、既應了、此心便又靜。虛明洞徹、無一毫之累、便從這裏應將去、應得便徹、便不難、便是安而後能慮。

(※) 事物之來、須去處置他。這一事合當恁地做、便截然斷定、便是慮而後能得。得是靜、慮是動。如良其止、止是靜、所以止之便是動。如君止於仁、臣止於敬、仁敬是靜、所以思要止於仁敬、便是動。

(f) 固是靜救動、動救靜、然其本又自此心湛然純一、素無私始得。心無私、動靜便一齊當理、心若自私、便都差了。⁽⁵⁾
(d) 動了又靜、靜了又動、動靜只管相生、如循環之無端。若要一於動靜、不得。如人之嘘吸、若一向嘘、氣必絕了、須又當吸、若一向吸、氣必滯了、須又當噓。噓之所以爲吸、吸之所以爲噓。尺蠖之屈、以求伸也。龍蛇之蟄、以存身也。精義入神、以致用也。利用安身、以崇德也。一屈一伸、一闔一闢、一消一息、一往一來、其機不曾停。大處有大闔闢、大消息、小處有小闔闢、有小消長。此理更萬古而不息。如日豈能不瞬時。亦豈能常瞬。又須開。開了定、定了又瞬、瞬了又定、只管恁地去。消息闔闢之機、至纖至微、無物不有。

先ず第一に気づくのは、表現の違いである。例えば、冒頭の質問部分(A)と(a)を訳出して比較してみよう。翻訳の形式は従来直接話法を踏襲する。

(A) 質問「昨夜先生が一之(林易簡)に動静の問題についてお答えになった折、『たとえば二人の人が一つのことをするようなもので、お互いに助け合ってこそ成し遂げられる』と言われました。私が思いますに、静は動を助けることができますが、動はどうやって静を助けることができるのでしょうか。」

(a) 徐の質問「昨夜動静の働きは相助け合うと言われましたが、静は動を助けることができます、動はどうやって静を助けることができるのでしょうか。」

(A) の質問は、記録者・徐禹自身のものである。それに対し(a)はそこに同席していた別の門人(陳淳)によるもので、明らかに(A)を要約した表現になっている。勿論たとえ(A)が記録者自身の質問であっても、必ずしも徐禹が朱熹の目の前

で実際に発言した言葉をそのまま記録に再現したとは限らない。しかし少なくともこの二つの記録の存在によって、どちらもその時の発言をそのまま写したのではないかもしれないという可能性は予想できる。

次に朱熹の答えの最初の部分(B)と(b)を比較してみる。

(B) 先生「人はあらゆる変化に通達してこそ、心はいつも静かにあるべきところにあるのだ。」

(b) 先生「道理を明らかにし尽して、万理が徹底的に明らかになった暁には、この心は静かに落ち着いて純一になる。そうすれば、そのようなことも可能になる。」

今度は(b)の方が(B)よりもやや詳しい。量的に多い方の記録が、朱熹の発言をより忠実に記録しているという可能性はあるかもしれないが、逆に(b)も朱熹自身の実際の言葉を逐語的に記録したのではない可能性を示して余りある。(C)以下と(c)以下の表現の違いについても同様のことが言えよう。

以上のことから、『語類』の記録は、基本的には門人たちによる朱熹の発言の内容の記録であって、朱熹の発言自体の記録ではないと考えた方が安全であろう。内容の記録である以上、大幅な要約も考えられ得る。⁽⁶⁾勿論、部分的にでも朱熹が実際に発した言葉を用いての記録もあるかもしれない。しかし、どこからどこまでが朱熹の発言の逐語的記録か確かめられない今となつては、もう一方の可能性の幅を最大限に見積もっておかなければならぬ。⁽⁷⁾

次に注目したいのは、記録における省略である。陳淳の記録には見える(※)以下の部分に対応する箇所は、徐禹の記録では抜け落ちている。このことは、表現の差異以上に大きな可能性を示唆している。即ち、我々が目にしている一まとまりの『語類』の記録は、ある場面での朱熹の発話あるいは対話の全体ではないのかもしれないということである。⁽⁸⁾

つまり、記録者によって切り取られたある部分を、我々は宛もその場の全体の発話・対話の流れとして強引に結びつけようとしているかもしれないということである。同じようなことは、(E)の質問が陳淳の記録には見えないことにも当てはまる。更にそのことも関連して記録の順序の違いが注目される。(F)が(E)の質問に答える流れの中で出てくるのに対して、内容的には同一の(f)は順序を変えて別の文脈の中に見えている。また(D)は(C)に続くのに対して、(d)は(f)に続くというように全体の流れに大きな違いがある。こういった相違は、語句・表現の違い以上に大きく全体の内容に関わる場合もあるであろう。文脈が変われば、あるいは文脈が断ち切られれば、ある概念の意味が変わることもあるはずである。

また例えばある条をそれだけで独立させて理解する場合と、たまたま残されている同一場面の別記録を参考にして理解する場合とで違いがあるとしたら我々はどう解釈すればよいのか。『語類』の中には、割注という形ではなく、独立した別個の条として同一場面のものとおぼしき別記録が残されている場合もある。次の三つの記録は、同じ場面の記録と考えられる。

卷二・96条、蓋脚

…李徳之問、薛常州九域圖如何。曰、其書細碎、不是著書手段。予決九川、距四海了、却逐旋爬疏小江水、令至川。此是大形勢。

卷七十九・18条、方子

李得之問薛常州九域圖。曰、其書細碎、不是著書手段。予決九川、距四海、濬峽滄距川。聖人做事、便有大綱領、先決九川、距四海了、却逐旋爬疏小水、令至川。學者亦先識箇大形勢、如江河淮先合識得。渭水入河、上面漆沮涇等又入

渭、皆是第二重事。桑欽鄠道元水經亦細碎。：

（割注）學蒙錄云

因說薛氏九域志、曰、也不成文字、細碎了。禹決九川、距四海、濬吠澮距川、這便是聖人做事綱領處。先決九川而距海、然後理會吠澮。論形勢、須先識大綱。如水、則中国莫大於河、南方莫大於江、涇渭則入河者也。先定箇大者、則小者便易考。：

例えば卷二の条だけを読む時、「大形勢」なる語は何か唐突の感じがして分りにくい。試みにこの条を訳出してみると次のようになるであろうか。「大形勢」は敢えて訳さない。

李徳之「薛常州の『九域図』はどうでしょうか。」

朱熹「あの書は細かすぎて、書物の書き方としてなっていない。『予、九川を決し四海に距らしめ（禹は九州の大きな川を通して、それを四海に至らせ）』てそれから小さな川を順番に通して（大きな）川に至らせる。これが大形勢というものだ。」

しかし、卷七十九の条及びその割注の別記録を見れば、この「大形勢」が、地勢の大枠・概要を意味していて、朱熹が瑣末に過ぎる薛氏の『九域志』の書き方を、禹の治水事業の大から小へ、全体から部分へという順序を例に批判している文脈で出てきているということがよく分かる。こうした例からも、記録が大幅に省略・要約されたことよって、本

来の意味合いが見えにくくなってしまっているケース、あるいは更に本来の意味とかけ離れてしまっているケースがあるかもしれないという危惧を抱かざるを得ない。

以上の比較から最低限指摘できることは、『語類』の言葉の中には、朱熹の実際の発言からも、その場の発話・対話の流れからも大きく隔たった記録があり得るということであり、そういった記録が存在する限り、その可能性は基本的には『語類』の全記録についても否定できないということである。記録者がいかに朱熹に忠実に記録しようとしていたとしても、忠実であるべきは朱熹の発言を通して理解された意味に対してであって、必ずしも発言そのものに対してではなかったはずだ。従って、記録者は自身の理解した意味を自身の言葉で以って再現していたのかもしれない。そうであるならば、『語類』の言葉は一体誰の言葉なのだろうか。記録者たちが意図的に朱熹の意味を捻じ曲げない限り、『語類』の思想は朱熹の思想であるといってもよい。しかし、我々の目の前にある『語類』の言葉は朱熹の言葉であるとは言い切れないのである。『語類』の言葉は朱熹が書き連ねたものでない以上本質的には全て記録者の言葉でしかありえないという当たり前の事実も、『語類』の背後に広がる目に見えない可能性の幅の内に改めて意識されなければならない。

2. 朱熹の言葉と記録者の言葉

『語類』の中には、朱熹の言葉として記録されている部分と記録者自身の言葉として記録されている部分とが混在する。両者の区別が比較の見易いのは、「問……」「曰……」等の形式がとられている場合である。又明らかに卜書きの表現や割注という形によって記録者の言葉であることが一目瞭然である場合も多い。そういった記録者の言葉のほとんど

は、朱熹の発話の状況を説明するものである。一つ例を挙げてみよう。

卷一百二十一・山条、泳

先生一日腰疼甚、時作呻吟聲。忽曰、人之爲學、如某腰疼、方是。

(割注) 在坐者皆不能問。泳久而思之、恐是爲學工夫意思接續、自然無頃刻之忽忘、然後進進不已。痛楚在身、雖欲無之而不可得、故以開論學者、其警人之意深矣。

先生はある日腰痛がひどく、時折うめき声をあげておられた。そして突然言われた「人の学問は、私の腰痛のようであればいけない。」

(割注) 同席していた者は皆どういう意味か問うことができなかつた。私は後で考えてみたが、恐らく学問に対する気持ちが途切れなければ、自然に片時も忘れることがなくなる、そうなれば学問は進歩してやまない、それはちょうど痛みが身にあれば無くそうとしても無くせないようなものだ、ということであろう。だから先生はこのことで学ぶ者たちをお教えになったのだ。先生の我々を警告するお心はなんと深いものか。

この例では、「人之爲學、如某腰疼、方是」が朱熹の言葉であり、それ以外の部分は全て記録者胡泳の言葉であることが形式上は区別できる。こういった例からは、記録者は少なくとも朱熹の言葉と自分の言葉の区別を意識して記録していることが分かる。しかし、『語類』の言葉の中には、朱熹の言葉と記録者の言葉が渾然一体となっていて、両者の境界が極めて曖昧なものもある。形式上「曰……」等の形をとらない条も、基本的には朱熹の言葉を記録したものであ

ろうが、既に述べたようにそれが逐語的な記録でないとしたら、記録者による解釈が紛れ込んでいても区別はつきにくい。『語類』の言葉は誰の言葉かという問いかけは、ここでも大きな意味をもつ。

但し、思想史研究の上では、少なくともそれが朱熹の言葉として読まれ続けてきたことの意味の方が大きい。『語類』の言葉が朱熹の言葉として読まれ続けたことによつて、記録者はその存在を朱熹に溶け込ませるように消し去り、『語類』を読む者に宛も自分が朱熹と直接相対しているかの如き錯覚を抱かしめる。しかしそこには無数の記録者の言葉による介在があることは、銘記されなければならないであろう。

このことと関連して注目したいのは、『北溪字義』のような他者の名を冠する後の時代の書物である。言うまでもなく、『北溪字義』は高弟の陳淳が朱熹の思想をいくつかの概念ごとにまとめた書物で、朱子学入門の書として広く読まれたものである。この書の中で陳淳は、時に「文公曰……」等の形式で朱熹の言葉を直接引用していることを示しているが、大半は形式上自らの言葉で朱熹の思想を祖述している。『北溪字義』を読む者は、その言葉を朱熹の言葉として読むのであろうか、陳淳の言葉として読むのであろうか。誰の言葉であるということは意識せず、その内容だけを朱熹の思想としてあるいは陳淳の思想として読むのであろうか。しかし、朱熹の思想を朱熹の言葉として読むことと、陳淳の言葉として読むことは同じではない。我々は、『語類』を読むようには『北溪字義』を読まないであろうから。しかし、上に述べた『語類』の記録の問題を考えるならば、そこにどれだけの違いがあるかは心許ない限りである。例えば、次の二つの言葉を比較してみたい。一つは『北溪字義』の陳淳の言葉、もう一つは『語類』の中の陳淳が記録した朱熹の言葉である。⁹⁾

『北溪字義』 恭敬

『朱子語類』の記録をめぐる一考察

恭就貌上説、敬就心上説。恭主容、敬主事。

恭有嚴底意、敬字較實。

『語類』卷六・146条、淳

恭主容、敬主事。有事著心做、不易其心而爲之、是敬。恭形於外、敬主於中。自誠身而言、則恭較緊、自行事而言、則敬爲切。

この両者を並べた時、前者は後者の朱熹の言葉の祖述に過ぎないという結論で終わるよりも、逆に朱熹の言葉として読まれている『語類』の言葉も所詮『北溪字義』の言葉と同じ程度にしか朱熹の言葉として読み得ないということの方が重要であろう。¹⁰⁾

二、話し言葉と白話と文言

前章で『語類』の言葉が必ずしも朱熹の発言を逐語的に記録したものではないことの可能性について述べたが、それは何も門人たちの記録のしかただけによるものではない。そもそも話し言葉(口頭語)を逐語的に記録すること自体が、当時において不可能であったかもしれないのである。『語類』は白話を用いて記録された語録であるということに、大きな価値が見出されていることは既に述べた。書き言葉としての文言の伝統が強固な古い時代の中国において、白話の登場は画期的な意味を持ったに違いない。しかし、ここで改めて問い直してみたいのは、そもそも白話とは何かということである。白話とは、当時の話し言葉であるというような大雑把な言い方を耳にすることもあるが、当時

の人たちが実際に話していた言葉と書かれた所謂白話の文章が、音声と文字の違いはあれ同じものであったとは限らない。現代の我々にあっても、書き言葉と話し言葉の違いは意識できるが、我々は話すように書くことができる。しかし、朱熹たちにとって同じことが可能であったかどうかはわからないのである。¹¹⁾

1. 白話と文言

白話は当時の話し言葉であるといわれるが、少なくとも我々の目の前にあるのは書かれた話し言葉である。つまり、白話も文言と同様書き言葉なのである。それでは白話と文言の違いをどう定義すればよいのであろうか。¹²⁾例えば、程子の言葉を集めた『程氏粹言』を編集した張栻はその序の中で「…變語録而文之者也」（「河南程氏粹言序」）と述べている。即ち、『粹言』の言葉は、『程氏遺書』等の語録を文言化したものということであろう。『粹言』の中で程子の同じ発言が『遺書』にも記録されている箇所があるので、それを比較してみたい。¹³⁾

『粹言』卷一・論書篇・74条

子曰、論語一書、未易讀也。有既讀之而漠然如未嘗讀者、有得一二而啓悅其心者、有通體誠好之者、有不知其手之舞之足之踏之者。

『遺書』卷十九・80条

先生云、某自十七八讀論語、當時已曉文義、讀之愈久、但覺意味深長。論語、有讀了後全無事者、有讀了後其中得一兩句喜者、有讀了後知好之者、有讀了後不知手之舞之足之踏之者。

『粹言』卷二・心性篇・94条

子曰、人心、私欲也、危而不安。道心、天理也、微而難得。惟其如是、所以貴於精一也。精之一之、然後能執其中、中者極至之謂也。

『遺書』卷十九・54条

人心、私欲也、道心、正心也。危言不安、微言精微。惟其如此、所以要精一。惟精惟一者、專要精一之也。精之一之、始能允執厥中。中是極至處。……

『粹言』の言葉と『遺書』の言葉を比較して、前者が後者より文語的であり、後者が所謂白話を含むことは一応指摘できるかもしれない。しかし、この程度の差異が当時の書き手に一体どのように意識されていたのか。「雅」ではない、卑俗である、というような白話語録に対する批判は予想できるが、それは文言という伝統からの逸脱という意味においての文言と白話の峻別であろう。¹⁴⁾文字によって記録するという意味において当時の書き手にとっては、我々が想像する以上に、白話と文言との距離は近かったのではないか。少なくとも話し言葉(口頭語)と白話との距離の方がはるかに隔たっていたはずである。即ち、当時の人々にとって「書く」≡文字化するという行為と「話す」という行為の間には、話すように書くことができる我々には見えにくい深い溝が横たわっていたのではないだろうか。

2. 話し言葉と白話

白話は本質的には書き言葉であり、我々が考えるような言文一致ではないかもしれないことは、上に見た通りである。それでは当時、朱熹と門人たちとは、どのような言葉で話していたのだろうか。方言の激しい中国において、福建

の片田舎で行われた「講学」は実際にどのような言語においてなされていたのであろうか。この問題に関しても無論事實は確かめようがない。おそらくは、所謂「官話」と呼ばれる当時の士大夫の共通語が用いられていたのであろう。つまり、当時の士大夫たちは、話し言葉においてすらある種の二重言語状態であったことが予想される。このバイリンガル状況の上に更に書き言葉の二重性が重なる。たとえ所謂白話が当時の朱熹たちの発言をそのまま文字化したものであったとしても、当時の話し言葉（官話）が彼らの意識の中でどういう位置を占めていたかは不明である。まして幾分なりともより日常的な方言の要素が当時の「講学」の場に持ち込まれていたとしたら、『語類』の言葉の性質をより言語学的に分析した上でなければ、発話・発言の記録としての語録という安易な結びつけは危険である。こういったことを考え合わせるならば、『語類』が白話で記録されたことの意義をそう軽々には論じることではできないであらう。

結 語

以上のような『語類』の記録をめぐる様々な可能性を踏まえて、それでは我々は今『語類』をどのように読めばよいのであろうか。朱熹の発言そのままではないかもしれない言葉を、どのような形式で翻訳すればよいのであろうか。従来のように朱熹の発言を再現するような形で翻訳することは、何かを大きくゆがめてはいないだろうか。とはいえ、他にどのような形式があるというのか。ここで我々は『語類』に対する態度決定を迫られることになる。そもそも『語類』の記録が朱熹の発言を逐語的に記録したものでないとしたら、『語類』は原理的には記録者による朱熹との対話の創造的再現であることを免れない。それをいかに客観的に忠実に翻訳したとしても、朱熹の生の声からは遠ざからざるを得ない。それでは『語類』に資料的価値を一切認めないことが、研究者の良心なのであろうか。逆に『語類』が朱熹の言

葉ではないとしても、朱熹の思想内容を記録しようとしたものには違いないという一点をとらえて、敢えて朱熹の言葉として読み且つ翻訳しても差し支えないと考えるべきなのであろうか。どちらの態度をとるにしても、どちらか一方に開き直ることは、生産的なことではあるまい。本稿でその一端を示したような『語類』の記録をめぐる不確定要素を常に具体的に意識しつつ、それでも今日の前にある言葉をできるだけ実証的に読み解こうとすること、そしてどれだけ客観的な資料読解を目指しても、『語類』の翻訳は本質的には我々と記録者たちとが共同して行う創作行為でしかあり得ず、我々の為し得ることは朱熹の言葉を「作品として」再現することだけなのだということに覚悟すること、こういった態度を主体的に引き受けることこそが、『語類』を読み朱熹の思想を研究する者としての義務であると考えられる。それは又長い朱子学研究の歴史の中で多くの研究者が無言のうちに前提としてきた態度であると信じたい。

『語類』の言葉は誰の言葉なのか、という本稿の問いかけは、既に述べたように思想史研究においては大した意味を持たないかもしれない。それは例えば『論語』の言葉を孔子の言葉として読むことに今更疑義を呈したところで、何か思想的な新事実が明らかになるものでもないのと同じことである。『論語』という古典作品に孔子の言葉として読まれた長い長い歴史があるのと同様に、『語類』には朱熹の言葉として読まれた歴史があり、思想史においてはそのことのみが意味を持つ。しかしながら、時間と空間を隔てた「今」の地点から朱熹の思想と向き合い、朱熹の思想を自らの言葉と論理で理解し表現しようとする者にとっては、自身と朱熹の間を隔てる様々な要素に無関心ではいられない。あたうる限りの介在物を教え上げ、それを踏まえた上で朱熹の言葉を自身の言葉によって創り出したいというのが、筆者の『語類』翻訳作業の基本的な態度である。

【注】

(1) 筆者は宋明研究会の一員として『汲古』（汲古書院）に連載中の『語類』の訳注作業に参加している。又個人的にも卷一百一十三以下の訳注を本誌『明治大学教養論集』に連載中である（通巻三一八、三二七、三三九号）。本稿は、そうした訳注作成の実際の作業の中で筆者がぶつかった疑問点であり、筆者なりの翻訳に対する態度を摸索するための試みである。

(2) 『語類』の書誌学的な研究には次のようなものがある。市川安司「朱子語類雜記」（『東京大学教養部人文科学科紀要』第二二輯、『朱子哲学論考』汲古書院所収）、友枝龍太郎「朱子語類の成立」（『日本中国学会報』第十五集、『朱子の思想形成』春秋社所収）、佐藤仁「朱子語類の歴史」（『久留米工業高等専門学校研究報告』第八号）、福田殖「朱子語類の各種版本について」（『九州中国学会報』第十五卷）、岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」（中文出版社『和刻本・朱子語類大全』所収）等。

また、道学にとつての口語語録の意義については、土田健次郎「口語語録の古典化」（『古典学の再構築』第五号、二〇〇〇年）を参照。

(3) 「講学」とは、当時それぞれの学派が書院などで盛んに行つた学問的議論を指す。「講」は話すことを意味するが、当時の「講学」の盛行と白話による語録が多く残されたことは勿論無関係ではあるまい。

(4) 引用は全て中華書局・理学叢書の『朱子語類』を用いる。但し記録の原形を比較するために「『』」の類は全て外し、標点のみを簡略化した形で示し、比較しやすいように(A)(a)等の符号を付して段落に分けて改行した。

(5) 中華書局本は「差子」に作るが、前掲の本文及び和刻本により「差了」に改めた。

(6) 要約ということでは、大変珍しい例であるが次のような記録も残っている。

卷六・119条、方

仁。○鷄雛初生可憐意與之同。○意思鮮嫩。○天理著見、一段意思可愛、發出即皆是。○切脈同體。（割注）説多不能記、蓋非言語可喻也。

(7) 但し、『語類』の編集者によって付せられたと考えられる割注の中には、同一場面の同一記録の存在を予想させるものがある。例えば条末に「『同』『録同』『録略』『録少異』といった注がつけられているケースや、文中のある言葉について「『作□□』『作□□』というように字句の相違が指摘されているケースがまま見られる。このことは何を意味しているのであらうか。既に述べたように、門人たちが記憶を頼りに後に記録したとすれば、同じ記録、ほぼ同じ記録が存在するということがむしる驚異ではないか。『語類』の記録の中には朱熹の発言を逐語的に記録したものも存在するということを示しているのであろうか。もしそうであるならば、問題は一層複雑になる。ただ別記録の場合と違って、同じ記録は残されていないので、その実情を窺う

手立てがない。ここではそういった可能性の存在を指摘するに止めておく。

(8) 次の二つの条は、「璘録別出」とあるように同一場面の別記録とされているが、かなり表現が異なり、『論語』為政篇の引用も異なっている。仮に同じ場面の記録であるとすれば、おそらく朱熹は孔子の「三十而立」についても「七十而従心」についても(あるいは他の年齢についても)語ったのであり、記録者が取捨選択したと考えるべきなのであろう。

卷十五・103条、可学

問、知至而后意誠。曰、知則知其是非。到意誠實、則無不是、無有非、無一毫錯、此已是七八分人。然又不是今日知至、意亂發不妨、待明日方誠。如言孔子七十而従心、不成未七十心皆不可従。只是說次第如此。白居易詩云行年三十九、歲暮日斜時。孟子心不動、吾今其庶幾。詩人玩弄至此。(璘録別出)

卷十五・104条、璘

舜功問、致知誠意是如何先後。曰、此是當初一發同時做底工夫、及到成時、知至而后意誠耳。不是方其致知、則脫空妄語、猖狂妄行、及到誠意方始旋收拾也。孔子三十而立、亦豈三十歲正月朔一日乃立乎。白樂天有詩吾年三十九、歲暮日斜時。孟子心不動、吾今其庶幾。此詩人滑稽耳。

なお、同一場面の記録である可能性を窺わせながらも、表現的にも量的にも大きく異なる例は他にも見られる。例えば次の二つの条を比較されたい。

卷一百一十四・5条(訓文蔚)

因說僧家有規矩嚴整、士人却不循禮、曰「他却是心有用處。今士人雖有好底、不肯爲非、亦是他資質偶然如此。要之、其心實無所用、每日閑慢時多。如欲理會道理、理會不得、便掉過三五日、半月日不當事、鑽不透便休了。既是來這一門、鑽不透、又須別尋一門。不從大處入、須從小處入、不從東邊入、便從西邊入、及其入得、却只是一般。今頭頭處處鑽不透、便休了。如此、則無說矣。有理會不得處、須是皇皇汲汲然、無有理會不得者。譬如人有大寶珠、失了、不著緊尋、如何會得。」

卷一百二十一・7条、圃

因言及釋氏、而曰「釋子之心却有用處。若是好叢林、得一好長老、他直是朝夕汲汲不捨、所以無有不得之理。今公等學道、此心安得似他。是此心元不曾有所用、逐日流蕩放逐、如無家之人。思量一件道理不透、便颺「去声。」掉放一壁、不能管得、三日五日不知拈起、每日只是悠悠度日、說閑話逐物而已。敢說公等無一日心在此上。莫說一日、一時也無、莫說一時、頃刻也無。悠悠濛濛、似做不做、從生至死、忽然無得而已。今朋友有謹飭不妄作者、亦是他資稟自如此。然其心亦無所用、只是閑慢過日。」或云「須是汲汲。」曰「公只會說汲汲、元不曾汲汲。若是汲汲用功底人、自別。他那得工夫說閑話。精專懇切、無一時一息不在裏許。思量一件道理、直是思量得徹底透熟、無一毫不盡。今公等思量這一件道理、思量到半間不界、便掉了、少間又看那一件、那件看

不得、又掉了、又看那一件。如此没世不濟事。若真箇看得這一件道理透、入得這箇門路、以之推他道理、也只一般。只是公等不曾通得這箇門路、每日只是在門外走、所以都無入頭處、都不濟事。」「又曰「若是大處入不得、便從小處入、東邊入不得、便從西邊入。及至入得了、觸處皆是此理。今公等千頭萬緒、不曾理會得一箇透徹、所以東解西摸、便無一箇入頭處。」又曰「學道做工夫、須是奮厲警發、悵然如有所失、不尋得則不休。如自家有一大光明寶藏、被人偷將去、此心還肯放捨否。定是去追捕尋捉得了、方休。做工夫亦須如此。」

(9) 『北溪字義』は中華書局・理学叢書を用いる。

(10) 参考のために、「文公曰：」の形で陳淳が引いている朱熹の言葉と、それに近い表現の『語類』の記録とを並べておく。

『北溪字義』恭敬

文公曰、以成德而論、則敬字不如恭之安。以學者做工夫而言、則恭字不如敬之切。

『語類』卷六・147条、揣摩

初學則不如敬之切、成德則不如恭之安、敬是主事。：

(11) 以下に論じる白話の問題については、早稲田大学の古屋昭弘教授よりご教示を賜った。この場を借りて深く感謝の意を致したい。ただ中国語学の専門的な知識に乏しい現在の筆者には、ここで疑問とした問題を現時点で深く掘り下げることができない。ここでは『語類』を通しての疑問点を指摘するに止め、中国語学的な検討は今後の課題としたい。

(12) 白話(口語)と文言の定義や認定は中国語学の分野でも大きな問題であるらしい。古屋昭弘「明代知識人の言語生活―万暦年間を中心に―」(神奈川大学中国語学科創設十周年記念論集『現代中国語学への視座―新シノロジー・言語篇』一九九八)注(4)参照。いくつかの虚字の存在や補語の使われ方などが識別の有効な手段になるということである。

(13) 『粹言』『遺書』ともに、中華書局・理学叢書『二程集』を用いる。

(14) 市川安司前掲論文の中で、錢大昕の語録批判が取り上げられている。

(かきうち・けいこ 文学部専任講師)